

重点取組分野	平成28年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①全学級で見通しとふりかえりを大切に授業を行い、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る。②重点研のテーマを「自分の考えをもち、主体的に表現できる子の育成をめざして」と設定し、算数科を中心に既習事項を生かして考える授業を展開し、主体的に学習する児童の育成をめざす。③地域や家庭と連携し、学習習慣の定着を図る。	○どの教科でも「課題」「見通し」「まとめ」「ふりかえり」の展開をもとに授業を組み立てることが学校全体で共通理解できた。 ○既習事項の活用を大切に授業を展開したことで、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図ることができた。 ○学年に応じた家庭学習を工夫し、学力の底上げと家庭学習の定着に努めた。	B
豊かな心	①子どもが道徳の授業と実生活を関連づけて理解できるような道徳の授業方法や教材の効果的な活用等の研究を進めていく。②全学級の道徳の授業を、家庭・地域に年1回以上公開する。③縦割り活動など、異年齢集団活動を充実させ、いろいろな友達とかわり合いながら、主体的、意欲的に行うことができるようにする。	○道徳の授業と実生活を関連づけて考えられるような教材研究に努めた。 ○全学級で道徳の授業公開が行われた。学校をひらく週間の公開が多くみられ、保護者に理解を深めることができた。 ○計画的にペア学習活動を行い、自己有用感の達成に努めた	B
健やかな体	①一校一実践として校庭に短縄コーナーを作り、目標に向かって取り組めるようにする。②横浜市体育協会や地域と連携し、「いきいきキッズタイム」を設け、子どもがいろいろな遊びに触れることで、体を動かすことの楽しさが味わえるようにする。③すこやか委員会を中心にペース走大会などを企画し、体力アップに取り組む。	○縄跳びカードの配布や集会によって、縄跳びに進んで取り組もうとする児童が増えた。 ○地域の方々や横浜市体育協会と連携し、外遊びを活性化することができた。 ○すこやか委員会を中心にペース走や縄跳びタイムなどを企画し、体力アップに向けての取り組みができた。	A
児童・生徒指導	①「学校のきまり」を見直し、「身だしなみについて」の項目を追加する。事案に応じて子どもや保護者に対して学校として統一した声かけを行っていく。②「児童指導上の確認事項」を項目別に直し、指導にばらつきがないようにする。③必要に応じてケース会議を開き子どもの特性を共通理解した上で、具体的な支援の仕方や支援体制などを決めるようにする。	○「学校のきまり」や「児童指導上の確認事項」について、職員で共通理解を図り、学校全体で統一した指導を行うことができた。ぶれない指導を粘り強く、繰り返した。 ○学年・専任・管理職への連絡を密にし、組織的な対応を心がけた。必要に応じて、ケース会議を開き、具体的な対応などを検討することができた。	A
特別支援教育	①ケーススタディを取り入れた研修や子どもの特性についての情報交換の場を充実し、支援の仕方についての共通理解を図る。②身に付けた力を共有し、どの職員も同じねらいをもって指導にあたるようにする。③関係機関との連携を密にし、個々の子どもに対して適切な支援が行えるように指導計画を立て、学習環境を整える。	○情報交換を毎月行い、児童の特性・身に付けた力・指導の方向性等について、職員全体での共通理解に努めた。 ○必要に応じて、関係機関との連携を図り、適切な支援につなげられるようにした。情報の共有・引継ぎについて改善計画を立てることができた。	B
地域連携	①学校教育説明会(年2回)で、中期学校経営方針やその進捗状況を保護者に説明し、学校運営への理解と協力を得る。②「まちとともに歩む学校づくり懇話会」(年3回)で中期学校経営方針やその進捗状況・学校評価について説明し、学校関係者評価・情報共有の機会とする。地域と一体となり、学校運営・子どもの健全育成に取り組めるようにする。	○学校教育説明会等で保護者の参加を増やしたり、学校の取組を伝えたりするなど、学校運営への理解と協力をより得られるように努めた。 ○「まちとともに歩む学校づくり懇話会」で、新たな学校評価のサイクルや進捗状況について説明や情報共有で、地域と一体となって学校運営・子どもの健全育成に努めた。	B
いじめへの対応		○誰もが安心して参加でき、自尊感情を高める授業づくり・集団づくりを進めている。②校長のリーダーシップのもと、専任教師を中心にカウンセラー等を積極的に活用し、関係機関とも連携できる児童生徒指導体制を構築している。	A
人材育成・組織運営	①月一回のメンターチーム研修を担当の主幹教諭・5年次教諭で計画し、推進する。校内人材を活用して教員同士で学び、授業力向上・児童理解等の研修を行う。②一人一役でまとめ役となり、大組織をリード・運営していく力を高める。各部・各委員会内で意思疎通を密にし、チーム力を生かすとともに、円滑な引き継ぎにもつなげる。	○メンターチーム研修は、校内人材を活かしながら活発に行われている。経験年数の浅い職員のスキルの向上に大きな役割を果たしている。 ○一人一役で担当者を中心に、仕事を協働的に円滑に進められている。各担当部門が責任をもってボトムアップで大組織をリード・運営するシステムが構築された。	A
ブロック内相互評価後の気付き	○ワークシート、教材、掲示物、映像、場の設定などを工夫し、見直しをもてるようにしたり、基礎的・基本的な知識・技能の習得を確実にしたりできるような、授業づくりに努めた。 ○興味・関心をもって、一生懸命に取り組むようになる題材や落ち着いて、効果的に学習に取り組める児童対応がなされていた。 ○小中での連携を大切に、児童にとっての大切な9年間を育てていきたい。	○グループ活動を取り入れたり、場の設定を考えたりして、主体的で対話的な授業になるようそれぞれ工夫して授業改善に努めることができた。 ○外国語活動においては、小学校のうちは子どもたちが耳でたくさん音をインプットし、中学校に行ったらたくさんアウトプットできるようにしたい。 ○「原中生の合唱を聴こう」では、中学校で金賞を取ったクラスの合唱を、全校児童が真剣に聴く姿が見られた。今後この活動を継続していきたい。	B
学校関係者評価	○「6年生を送る会」では、6年間で児童の育ちがよく分かった。発表を見る児童の態度も素晴らしい。小中での連携を大切に、児童にとっての大切な9年間を育てていきたい。 ○職員が、同じ指導方針で児童を指導していることが、子どもたちにとっても、とてもよいことだと感じた。学校での指導を受けて、地域でも子どもたちを見ていきたい。 ○朝は、学校での一日があるので緊張しているようだが、帰りは開放感のためか児童からあいさつしてくれる。	○「6年生を送る会」を卒業の一月前に行うことで、6年生がゴールを意識して学校生活を送ることができる。また、5年生が「来年度は自分たちが原小学校を支えていく」という気持ちをもつことにつながっている。 ○いじめの定義のハードルが下がっている。子どものトラブルは本人同士で解決することが理想であるが、状況を見極め大人がしっかり対応することが必要。学校現場では丁寧な対応をお願いしたい。 ○自己有用感をもつことができるよう、小中9年間の学びの連続を意識して、低学年のうちから丁寧に指導していく必要がある。	B
学校経営中期取組目標振り返り	どの教科でも、ねらいを明確にした授業づくりを意識することができているが、基礎基本の定着やそれらを活用する力については、今後も課題であり引き続き取り組んでいきたい。異学年交流を意図的・計画的に取り組む中で子どもの心の育ちが図られているが、次年度は情操・情緒に視点をあて「豊かな心」の育ちの充実を図り、さらに自己有用感を育み自己表現力を高めていきたい。 今年度、より実効性のある学校評価を目指して中期学校経営方針と連動した学校評価のPDCAサイクルを構築したことで、職員の学校経営に対する参画意識の向上を図ることができた。	・学年研、いじめ防止対策委員会や職員会議の中での情報交換を密に行い、常に職員間で共通理解を図りながら、問題の早期発見・解決に努めることができた。 ・重点研(図工)の取り組みによって、主体的に表現を楽しんでいる児童が増えた。引き続き互いのよさを認め合える活動を意図的、横断的に行い、豊かな情操を養ってきたい。 ・中期学校経営方針の実現に向けて、それぞれが連携を取りながら歩みを進めることができた。カリキュラムマネジメントも組織的・計画的に進めていきたい。	B

重点取組分野	平成29年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①ねらいを明確にし、「見通し」「まとめ」「ふりかえり」を大切に授業展開を組み立てることで、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る。②重点研テーマを「自分の思いを生き生きと表現できる子の育成をめざして」と設定し、図工科を中心に、自分の表したい思いをもって主体的にかかわり、自分なりの表現を工夫し、自信をもって表現する子どもの育成をめざす。③地域や家庭と連絡し、	①めあてをもとに振り返るという流れが子どもに定着し、自分たちでまとめようとする力が身についた。②重点研の取り組みによって「思い」に合わせた表現の方法を考えられるようになり、主体的に表現を楽しんでいる児童が増えた。③学習進度に合わせた家庭学習に家庭と連携して取り組んだ。	B
豊かな心	①子どもが自分との関わりで道徳的価値を考えられるような道徳の授業の研究を進めていく。②図工の鑑賞や音楽の月の歌など、子どもが自分の思いを生き生きと表現し、互いのよさを認め合える活動を意図的、計画的に行い、豊かな情操を養う。③ペア学習活動など、異年齢集団活動を充実させ、多くの友達とかわり合いながら、主体的、意欲的に活動することができるようにする。	①メンター研修では、道徳を取り上げ子どもたちに寄り添った道徳の授業研究を行うことができた。②図工の鑑賞の授業では、一人ひとりの思いを認め合うことができた。③上半年が意欲的、主体的に活動の内容を話し合い準備することで、集会や特別活動でペア学習活動を楽しむ姿がたくさん見られた。	B
健やかな体	①一校一実践として校庭に短縄コーナーを作り、目標に向かって取り組めるようにする。②横浜市体育協会や地域と連携し、「いきいきキッズタイム」を設け、子どもがいろいろな遊びを経験できるのがとてもよかった。③ペース走では、すこやか委員会を中心に学校全体として活動することができたので、子どもたちも意欲的に取り組んでいた。	①縄跳びの見本動画やカードの工夫により子どものモチベーションが上がり、夢中になって取り組むようになった。②いきいきキッズタイムを通して、いろいろな外遊びを経験できるのがとてもよかった。③ペース走では、すこやか委員会を中心に学校全体として活動することができたので、子どもたちも意欲的に取り組んでいた。	A
児童・生徒指導	①「原小スタンダード」や「児童指導上の確認事項」について、職員で共通理解を図り、統一した指導を行う。②学年・専任・管理職への連絡を密にし、組織的な指導を行う。必要に応じてケース会議を開き、子どもの特性を共通理解した上で、具体的な支援の仕方や支援体制などを決めるようにする。③子どもとの見とりを丁寧に行うとともに、定期的にアンケートなどを実施し、児童理解	①職員会議で必ず児童指導の話があるので、全員で共通理解を図ることができ、その時期に応じた服装や持ち物のきまりを細かく確認することができた。②ケース会議やスタンダードで共有化できている。「報告・連絡・相談」がしやすく、組織的に対応することができた。③アンケートの実施をきっかけに子どもに話をすることができた。	A
特別支援教育	①児童理解会議や交流委員会などで情報を共有し、安心して相談できる環境をつくる。②個別の支援計画を作成し、達成目標や支援内容をふまえた指導ができるようにする。③交流級だけでなく、学年全体で支援に当たれるよう、活動内容やねらい、支援方法を共有する。学年単位での活動や行事の前には適宜学年研等に参加し、見直しをもつ指導、支援ができるようにする。	①特別支援の先生と頻りに声をかけ合い、児童の様子やそれに合った支援方法を相談することができた。②取り出しの授業では、担当の先生や保護者と連絡を取り合い、計画的に指導を行った。③情報交換をする場が確保されていることで、安心して声をかけ合ったり見守ったりすることができている。	B
地域連携	①学校教育説明会(年2回)で、中期学校経営方針やその進捗状況を保護者に説明し、学校運営への理解と協力を得る。②「まちとともに歩む学校づくり懇話会」(年3回)で中期学校経営方針やその進捗状況・学校評価について説明し、学校関係者評価・情報共有の機会とする。地域と一体となり、学校運営・子どもの健全育成に取り組めるようにする。③地域の防災訓練に子どもが参加する	①学校教育説明会では資料を通して、簡潔に経営方針や進捗状況を伝えることができた。②「まちとともに歩む学校づくり懇話会」では、子どもたちの情報交換ができており、課題や成果を共有することができた。③小中連携して、近隣校の担当者や、合同引き渡し訓練に向けた話し合いを行うことができた。	B
いじめへの対応		①横浜プログラムや人権教育等を通して、自尊感情を高める授業づくりを進めることができた。②児童指導専任を中心に、児童や家庭の様々なケースについて相談したり、対処したりすることができている。スクールカウンセラーの先生とも密に情報交換を行うことができた。	A
人材育成・組織運営	①月一回のメンターチーム研修を5年次教諭を中心に計画し推進する。校内人材を活用して教員同士で学び、授業力向上・児童理解等の研修を行う。②一人ひとりが学校運営組織の一員であることを自覚し、積極的に学校運営に参画できるよう、校務分掌の理解を深め役割と責任を明確にする。③副校長の校内巡回する時間を増やし教職員への指導・助言をする機会を増やすとともに、教員	①メンター研修では、10年次研修と連携して内容を充実させることで、授業力向上につながった。②それぞれが自分の仕事に責任をもって取り組むことができている。③管理職の先生が直に子どもたちの様子を見てくれたので、課題や成果を共有することができた。	B
ブロック内相互評価後の気付き	○ワークシート、教材、掲示物、映像、場の設定などを工夫し、見直しをもてるようにしたり、基礎的・基本的な知識・技能の習得を確実にしたりできるような、授業づくりに努めた。 ○興味・関心をもって、一生懸命に取り組むようになる題材や落ち着いて、効果的に学習に取り組める児童対応がなされていた。 ○小中での連携を大切に、児童にとっての大切な9年間を育てていきたい。	○グループ活動を取り入れたり、場の設定を考えたりして、主体的で対話的な授業になるようそれぞれ工夫して授業改善に努めることができた。 ○外国語活動においては、小学校のうちは子どもたちが耳でたくさん音をインプットし、中学校に行ったらたくさんアウトプットできるようにしたい。 ○「原中生の合唱を聴こう」では、中学校で金賞を取ったクラスの合唱を、全校児童が真剣に聴く姿が見られた。今後この活動を継続していきたい。	B
学校関係者評価	○「6年生を送る会」では、6年間で児童の育ちがよく分かった。発表を見る児童の態度も素晴らしい。小中での連携を大切に、児童にとっての大切な9年間を育てていきたい。 ○職員が、同じ指導方針で児童を指導していることが、子どもたちにとっても、とてもよいことだと感じた。学校での指導を受けて、地域でも子どもたちを見ていきたい。 ○朝は、学校での一日があるので緊張しているようだが、帰りは開放感のためか児童からあいさつしてくれる。	○「6年生を送る会」を卒業の一月前に行うことで、6年生がゴールを意識して学校生活を送ることができる。また、5年生が「来年度は自分たちが原小学校を支えていく」という気持ちをもつことにつながっている。 ○いじめの定義のハードルが下がっている。子どものトラブルは本人同士で解決することが理想であるが、状況を見極め大人がしっかり対応することが必要。学校現場では丁寧な対応をお願いしたい。 ○自己有用感をもつことができるよう、小中9年間の学びの連続を意識して、低学年のうちから丁寧に指導していく必要がある。	B
学校経営中期取組目標振り返り	どの教科でも、ねらいを明確にした授業づくりを意識することができているが、基礎基本の定着やそれらを活用する力については、今後も課題であり引き続き取り組んでいきたい。異学年交流を意図的・計画的に取り組む中で子どもの心の育ちが図られているが、次年度は情操・情緒に視点をあて「豊かな心」の育ちの充実を図り、さらに自己有用感を育み自己表現力を高めていきたい。 今年度、より実効性のある学校評価を目指して中期学校経営方針と連動した学校評価のPDCAサイクルを構築したことで、職員の学校経営に対する参画意識の向上を図ることができた。	・学年研、いじめ防止対策委員会や職員会議の中での情報交換を密に行い、常に職員間で共通理解を図りながら、問題の早期発見・解決に努めることができた。 ・重点研(図工)の取り組みによって、主体的に表現を楽しんでいる児童が増えた。引き続き互いのよさを認め合える活動を意図的、横断的に行い、豊かな情操を養ってきたい。 ・中期学校経営方針の実現に向けて、それぞれが連携を取りながら歩みを進めることができた。カリキュラムマネジメントも組織的・計画的に進めていきたい。	B

重点取組分野	平成30年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①本時で身に付けさせたい力を明確にし、授業展開の工夫を図る。②重点研テーマ「自分の思いを生き生きと表現できる子の育成をめざして」は継続して研究に取り組み、図工科を中心に、自分の表したい思いをもって主体的にかかわり、自分なりの表現を工夫し、自信をもって表現する子どもの育成をめざす。	①本時の課題を明確にし、指導書だけでなく児童の思考や実態に合わせた学習展開ができるように工夫することができた。②学年で教材研究を行い、必要な教材・教具の準備をしたり、場の設定や支援の工夫をしたりしたこと、子どもの発想が広がりのびのびと表現することができた。	A
豊かな心	①「考え・議論する道徳」を目指し、授業方法や教材の効果的な活用などの研究を深めていく。②図工の鑑賞や音楽の月の歌など、子どもが自分の思いを生き生きと表現し、互いのよさを認め合える活動を意図的、計画的に行い、豊かな情操を養う。③ペア学習活動では、集会や本の読み聞かせ、遊びなどを通して、ペアとの関わりを深めることができた。	①道徳の進め方についてさらに研究を深めていく必要がある。②重点研から図工の鑑賞の指導法がわかり、自分の思いを表現することや互いのよさを認め合うことにつながった。③ペア学習活動では、集会や本の読み聞かせ、遊びなどを通して、ペアとの関わりを深めることができた。	B
健やかな体	①一校一実践として校庭に短縄コーナーを作り、カードを活用しながら目標に向かって取り組めるようにする。②横浜市体育協会や地域と連携し、「いきいきキッズタイム」を設け、子どもがいろいろな遊びを経験できるのがとてもよかった。③ペース走では、すこやか委員会を中心に学校全体として活動することができたので、子どもたちも意欲的に取り組んでいた。	①短縄学習が後期に集中していることもあり、なかなか年間を通じた取り組みができなかった。②いきいきキッズタイムでは、多くの児童が校庭に出て体を動かす姿が見られた。③朝休みにトラックを走るチャレンジマラソンでは、児童が意欲的に活動に取り組み、体力アップにつながった。	B
児童・生徒指導	①学年研やいじめ防止対策検討委員会、職員会議などで些細なことでも情報交換を行い、共通理解を図った上で、統一した指導を行う。②児童理解会議の進め方を見直し、効率的に質疑応答ができるようにする。③子どもとの見とりを丁寧に行うとともに、定期的にアンケートなどを実施し、児童理解と問題解決に努める。	①学年研の中でクラスの子どものことについて情報交換・共有をすることで、安心感をもって指導にあたることができた。②児童理解会議の内容をPDFデータで保存することで、必要ときに閲覧することができた。③児童や保護者へのアンケートを全体で分析し、その後の指導に生かすことができた。	A
特別支援教育	①児童理解会議や交流委員会などで情報を共有し、支援の仕方についての共通理解を図り、共通理解の支援計画を作成し、達成目標や支援内容をふまえた指導ができるようにする。③必要に応じて関係機関との連携を図り、適切な支援につなげられるようにする。	①児童理解会議や交流委員会などで情報を共有し、支援の仕方についての共通理解を図り、共通理解の支援計画を作成し、達成目標や支援内容をふまえた指導ができるようにする。③必要に応じて関係機関との連携を図り、適切な支援につなげられるようにする。	A
地域連携	①学校教育説明会(年2回)や「まちとともに歩む学校づくり懇話会」(年3回)で、中期学校経営方針やその進捗状況を保護者に説明し、学校運営への理解と協力を得る。②地域と一体となり、学校運営・子どもの健全育成に取り組めるようにする。③小中一貫ブロックによる合同引き取り訓練を実施する。	①学校説明会は出席率が低かったため、時期や内容の見直しが必要である。②学校評価の結果を踏まえ、指導にあたることができた。③今年度初めて小中合同の引き取り訓練を行ったが、スムーズに行うことができた。連携して行うことの重要性を改めて感じた。	B
いじめへの対応		①誰もが安心して参加でき、自己肯定感・自尊感情を高める授業づくり・集団づくりを進めている。②校長のリーダーシップのもと、専任教師を中心にカウンセラー等を積極的に活用し、関係機関とも連携できる児童生徒指導体制を構築している。③月1回のいじめ防止対策委員会で、情報共有を密に行う。	A
人材育成・組織運営	①月一回のメンターチーム研修を担当の主幹教諭・5年次教諭で計画し推進する。校内人材を活用して教員同士で学び、授業力向上・児童理解等の研修を行う。②一人一役でまとめ役となり、大組織をリード・運営していく力を高める。③副校長の校内巡回時間を増やし教職員への指導・助言をする機会を増やすとともに、教員の教材研究や子どもと向き合う時間を増やす。	①メンター研修では、10年次研修と連携して内容を充実させることで、授業力向上につながった。②それぞれが自分の仕事に責任をもって取り組むことができている。③副校長が決まった児童の対応に追われ、校内巡回する時間がなかなかとることができなかった。	B
ブロック内相互評価後の気付き	○ワークシート、教材、掲示物、映像、場の設定などを工夫し、見直しをもてるようにしたり、基礎的・基本的な知識・技能の習得を確実にしたりできるような、授業づくりに努めた。 ○興味・関心をもって、一生懸命に取り組むようになる題材や落ち着いて、効果的に学習に取り組める児童対応がなされていた。 ○小中での連携を大切に、児童にとっての大切な9年間を育てていきたい。	○小学校の外国語活動の時間が増えることで、英語に触れる機会も多くなる。英語を楽しむ気持ちを失わずに中学校にあがると、小学校で大切だと感じた。 ○「原中生の合唱を聴こう」では、昨年度と同様に、子どもたちが集中して歌声に耳を傾ける姿が見られた。 ○身に付けさせたい資質・能力を明確にして、ブロックでのイメージシートを作成した。それぞれの力が、どの教科と横断的に関わってくるかを検証していきたい。	B
学校関係者評価	○「6年生を送る会」では、6年間で児童の育ちがよく分かった。発表を見る児童の態度も素晴らしい。小中での連携を大切に、児童にとっての大切な9年間を育てていきたい。 ○職員が、同じ指導方針で児童を指導していることが、子どもたちにとっても、とてもよいことだと感じた。学校での指導を受けて、地域でも子どもたちを見ていきたい。 ○朝は、学校での一日があるので緊張しているようだが、帰りは開放感のためか児童からあいさつしてくれる。	○「6年生を送る会」を卒業の一月前に行うことで、6年生がゴールを意識して学校生活を送ることができる。また、5年生が「来年度は自分たちが原小学校を支えていく」という気持ちをもつことにつながっている。 ○いじめの定義のハードルが下がっている。子どものトラブルは本人同士で解決することが理想であるが、状況を見極め大人がしっかり対応することが必要。学校現場では丁寧な対応をお願いしたい。 ○自己有用感をもつことができるよう、小中9年間の学びの連続を意識して、低学年のうちから丁寧に指導していく必要がある。	B
学校経営中期取組目標振り返り	どの教科でも、ねらいを明確にした授業づくりを意識することができているが、基礎基本の定着やそれらを活用する力については、今後も課題であり引き続き取り組んでいきたい。異学年交流を意図的・計画的に取り組む中で子どもの心の育ちが図られているが、次年度は情操・情緒に視点をあて「豊かな心」の育ちの充実を図り、さらに自己有用感を育み自己表現力を高めていきたい。 今年度、より実効性のある学校評価を目指して中期学校経営方針と連動した学校評価のPDCAサイクルを構築したことで、職員の学校経営に対する参画意識の向上を図ることができた。	・夏の小中ブロック合同研修で、イメージシートの作成・活用について取り上げた。「自分をつくる力」を軸とする資質・能力に定め、それに関わる具体的な資質・能力についての意見交換を行った。そして、そこで出された意見を集約してイメージシートが完成した。今後のカリキュラムマネジメントや小中一貫教育で、十分に活用していきたい。 ・様々な問題が生じたが、管理職・児童指導専任を中心として組織的に対応にあたることができた。ただ、職員への負担が大きかったため、今後は状況に応じて早い段階で関係機関に協力を求めたい。	B